

ルリがあなたに逆 NTR 仕掛けてくるけど断ったら、ユカリ
公認で浮気セフレエッチ出来ることになったお話

(逆 NTR/乳揉み/正常位/中出し/ラブラブ飲尿させ)

■ ■ ■ ■ ■

「——これは、いったい何ですか、と訊いているんです？」

文節ごとに区切るような問いかけ。愛らしい女性の声色なのに凄みがある。そんな声に気圧されるようにして、あなたは息を呑んだ。

目の前に突きつけられたスマートフォンの画面。そこに映るのはあなたの——というよりも、ユカリの痴態だった。

ユカリと男女の、恋人の関係同士になってからしばらくして、彼女の提案で撮影した写真。あなたがユカリの豊満でワガママな乳房を背後から揉んだり、あなたの肉棒を味わうユカリの頭を褒めるように撫でたり……。そんな、一枚流出しただけでもユカリという女性の声優生命どころか人生までも簡単に終止符が打ててしまうような写真。

それが何故か、撮影したユカリ以外のスマートフォンの中に保存されている。

「——これ、あなたですよね？」

あなたにスマートフォンを突きつけているのは、ユカリではない。しかし、ユカリと同業者だ。

氷川ルリという名前で活動しているその女性は、ユカリと同じく声優とアイドルを二刀流で活動しているような女性だ。アイドルとしても活動しているだけあり、ユカリに負けず劣らず容姿は優れている。それどころか、単純な男性受けだけ考えればユカリよりもルリの方が遙かに上かもしれない。

真っ黒な髪の毛にはキューティクルの煌めきが走り、枝毛の一本もない。肌は白く、人形や陶器を思わせた。しっとり垂れた目蓋と、奥に覗く瞳。わざとらしく、そして主張するようにはめ込まれた碧いコンタクトはルリというアイドル声優のアイコンでありトレードマークである。その視線があなたを射抜いている。

射抜いてくる視線も問題だが、それ以前にルリがあなたの家に上がり込んでいること自体も充分な問題であった。

相も変わらず男性の一人暮らしであるあなたの部屋には似合わない華やかな服——黒系統でまとめられているが、ユカリのようにシンプルではない、いわゆる地雷系と呼ばれるような服をまとったルリは床に膝をつき、部屋の片隅にあなたを追いつめているのだ。

「——もう一度だけ訊いてあげます。これは、あなたですか？」

どちらかといえばおっとりとしたキャラクターを演じることの多いルリは、演者である時とは似ても似付かない恐ろしい声で、ルリは再度あなたに問いかけた。

あなたの脳裏を様々な考えが巡る。

あなたが、写真に写るのは自分でないと否定すれば？ あなたは助かるかもしれない。写真にはあなたの顔は写っていない。ごまかすことも不可能ではないだろう。

だが、ユカリはどうなるのか？ 写真の中にいるのは間違いなくユカリその人だ。あなたが助かったところで、ユカリの疑惑を払拭するには甚だ不足だ。

ならば――。

「――なるほど。認めるんですね。この写真に写るのが、あなただと」

あなたはユカリと一緒に地獄へ堕ちるために、深い首肯でルリへ返事をした。

あなたの返答を聞いたルリは、目蓋をスッと細める。その意味合いが、軽蔑なのか、あるいは得心なのか。あなたには判断できない。

「わかりました……。では、取引をしましょう」

取引。その言葉は、今のあなたにとって救いであり劇毒でもある。ルリが対価として提示するのは、十中八九、彼女が入手したユカリとあなたの写真に係わることだろう。金品か、

あるいはそれ以上のモノか。

ユカリを救うためならば、どんな対価でも支払う決意があなたにはあった。だが、要求されるモノがあなた一人で購えるモノである確証もない。自身に破滅が訪れることを覚悟しながら、あなたはルリに対して頷いて先を促す。

「————私とも、ユカリさんと同じようなコトをしてください」

しかし——ルリの口から発せられた“対価”とは、あなたの予想を裏切る内容だった。

提案の意味を理解できないあなたに対して、ルリは構わず距離を詰めてくる。この部屋で嗅いだことのない、ユカリとも異なる甘い匂いが壁になって押し寄せてくる感覚。

ルリは四つん這いの状態で、まるで肉食獣のようなしなやかさであなたに迫る。あなたはもう先ほどから部屋の隅に追いやられていて、逃げ場がない。

逃げ場を喪ったあなたに対し、更に迫るルリ。そのまま、口元はあなたの首筋に牙を立てるような所作で耳元へ。

「悪い提案ではないと思いませんか……？ 私のコト、ユカリさんのように抱けるんですよ……？♡」

あなたの耳元へ流し込まれるルリの声。先ほどまでの恐ろしさは息を潜め、甘ったるさで粘り着くような感覚。

心臓の音は容易に跳ね上がってしまう。破滅の予感を前にして冷めていた全身が覚醒し、一気に熱がこもる。

「——どうして……だなんて、つまらない質問……しないでください……♡ 私たちは職業柄、恋愛やスキャンダルは御法度……♡ でも、年頃ですし……人並みに性欲だって溜まるんですよ？♡ 毎日毎日、あなたのような男性から向けられる下卑た視線を浴びて……むらむら……むらむら……♡」

ルリはもうすでにあなたに半身覆い被さるような状態まで近づいている。そしてそのまま、更に無遠慮に距離を詰める。

むに……っ♡

ルリの乳房が自分の身体に押しつけられる感触が、あなたを襲った。

「そうしてムラついている中で、秘密を守るであろう男性が見つければ……そんなの、共有の肉バイブにするしかないじゃないですか……♡」

普段から画面越しで目にする、物静かで儂げなルリの印象からは想像も出来ない単語が転がり出てくる。しかしそれよりも、あなたにとっては全身に重なってくるルリの柔らかい身体感覚が強烈な誘惑になって堪らない。

「大丈夫、ユカリさんには秘密にしてあげます……♡ 浮気したって、バレません……♡ あなたと、私だけの秘密……♡」

ルリの手がゆっくりとあなたの太股を撫でる。爪の先で触れるか触れないか、そんな絶妙な距離感と力加減で刺激されて、あなたは思わず情けない吐息を漏らした。

「ほら、大丈夫……♡ 抱きしめてしまっ構いませんよ…
…？♡ 私の柔らかい身体、全部好きにしてください……♡
唇も、むさぼるみたいにキスされても抵抗しません……♡
ベロ肉絡めて、受け入れます……♡ 太股も、お尻も、髪の毛も……それにおっぱいも……♡ 味わいたくありませんか
……？♡ 私の、おっぱい……♡」

むにゅり……♡

言葉と共に質感が襲ってくる。押しつけられるルリの乳房。
堅い表面の感触は間違いなくブラジャーだが——その奥には、強烈な柔らかさが眠っている。

「困るんです、あまり胸が大きいと……♡ 男性からの視線が、ひどくて……♡ 私は声優なのに……まるでAV女優や、娼婦を見るように失礼な視線で……♡ だから、少し小さめのブラを着けてるんですよ……？♡ トップとアンダーの差ではユカリさんに負けますが——揉んでみたくありませんか……？♡ 112センチの、Nカップおっぱいを……♡」

かり……かり……♡

あなたのズボンに出来た膨らみ。それをあざ笑うかのように刺激するルリの爪。そのひと搔きごとに、理性が溶けてあなたの耳から出て行ってしまいそうだ。

「大丈夫……大丈夫……♡ 誰にも言いません……♡ 秘密は守ります……♡ あなたの好きにしてもらっていいですから……♡」

ほとんど抱きつくような姿勢であなたの耳を犯すように語りかけるルリ。あとはあなたがルリを抱きしめるだけ。小さなその身体を抱きしめれば、ネット上で男たちのオナペットになっているその身体を好きに出来る。

少しでも胸元の緩い服を着ればネット上が沸き立つルリの肢体。しかし、ガードが固いルリは安易に肌を見せない。それゆえ、少しでも乳房が強調される服を着ただけでも邪な男たちの視線が渦巻き、イニシャルや秘密の愛称で劣情を語られ続けるルリの肉体。それを、あなたは好きにできる権利を差し出されている。

簡単なことだ。これは取引。ユカリとあなた自身を守るた

めに必要なこと。だから誘惑に負けていい。仕方のないこと。
あなたに選択権はない。だから――

「―――そうですか……」

それでもあなたは歯を食いしばりながら、ゆっくりと優しく、ルリの身体を押し退けた。

ルリの身体に触れた手のひらから伝わる感覚、その柔らかさだけで背骨が溶けそうになる。これから訪れる破滅を前にして心が折れそうになる。

それでもあなたは、ユカリを裏切ることとは出来ないと意地を張ったのだった。

ルリはあなたにもわかるくらい大きなため息を吐くと、そのままスマートフォンを操作する。

その連絡先は週刊誌なのか、ユカリの事務所か。いや、今の状況であれば警察に連絡されるだけでもあなたはおしまいかもしれない。それでも自分の選んだ選択肢を曲げることは出来ずに、あなたは意地を張るように天井を見上げている。

「ああ、もしもし。——ユカリさん、お疲れさまです」

しかし、ルリの電話先の相手は、あなたの全く予想していない相手だったのだ。

驚きで顔を上げたあなたを見ると、ルリは電話をスマートフォンのスピーカーに切り替える。

「ユカリさん、貴女の言う通りでした。この人は、信頼できる人のようです」

『だからボクは大丈夫だって言ったのに……。ごめんね、キミにまで迷惑かけて。ビククリしたよね？』

電話口の向こうにいるユカリは、開口一番あなたへの謝罪を口にする。しかし、状況を飲み込めていないあなたは困惑するばかりだ。

そんなあなたに対して、ルリが口を開いた。

「ユカリさんの様子が最近おかしいので、私から問いつめました。するとどうやら、恋仲の人が出来たとのこと。けれど、ユカリさんは純で人がいいですから……。だから、騙されているのではないかと思い、私があなたを試しました」

『本当にごめん……。ルリがどうしても納得してくれなくて……。——でも、キミなら平気だって、信じてたよ』

ネタを明かされれば呆気ない。あなたは思わず脱力して、唸るほどに安心した。流石に手段が悪辣だと怒ってもいいのかもしれないが、その気にもなれなかった。そんな短絡的な怒りよりも、自分がしっかり正解の選択肢を選び取れた喜びのほうが大きい。

『——で、ルリはどうだった？♡』

安心しきったあなたに向けて、今度はユカリがとんでもない言葉を投げかけてきた。

その問いかけの意味が、卑猥で淫靡な色を帯びていることはあなたにだって容易に想像がつく。声の仕事をしているだけあって、ユカリの声色は千の表情よりも感情のニュアンスをストレートに伝えてくる。それ故に、いま部屋で二人きりという異様な状況に置かれたアイドル声優——ルリの前では、感想を述べるのは避けたかった。

「しっかり興奮していますよ、この人」

しかし、他ならないルリの方が、先にあなたの実情を暴露してしまう。ルリの言うとおりに、あなたは隠しようもなく興奮している。それどころか、安堵のせいで先ほどよりも更に勃起は激しくなっているほどだ。

『あはは！ やっぱりそうだよ。ルリ、女の子っぽくて可愛いもんね。男の人が好きな女の子って感じ。ボクよりよっ

ぽど男性ファンのウケいいし』

自分の彼氏が他の女性で勃起しているというのに、ユカリは電話口で大笑いをする。快活というか、無頓着というか。とにかく、会話を聞いているあなた自身が色々と一番気が気ではない。

『——ねえ、キミ？ ルリで興奮したなら、ちゃんとルリで発散してあげないとダメだよ。ボクはキミを信頼してるから……浮気くらい、許してあげる♡ 恋人公認の浮気、楽しんでね♡』

とんでもない提案を残して、ユカリは通話を切った。

部屋に残されたのは、あなたとルリだけ。あなたは、自分が息を呑む音すら聞こえてしまいそうな気がして、言葉を紡げない。

そんなあなたに対して、先にルリが口を開く。

「先ほど言った言葉……。『声優とアイドルを兼ねているが

故に性欲の発散が出来ず、困っている』という話ですが……。
——あれは、嘘ではありません」

ルリの白い肌。そのうち、頬だけがわずかに赤く染まっていた。

「はあ……んっ……♡ ん、ちゅ……♡」

欲求不満、というルリの言は本当だったのかもしれない。
あなたに抱きつき、背中に手を回し、唇を貪りながら、ペロ肉を絡めてくる。

「ん、れろ……♡ ん、ちゅ♡ ちゅ、う……♡」

自分の乳房が邪魔だと言わんばかりの密着。女性らしい細い腰にあなたが腕を回しながらその尻肉を揉むと、心地良さそうに声を漏らした。

「は、あ……♡ ふ、う……♡ ちょ、直接……触って……く

ださい……♡」

普段からシンプルな服装をしているユカリと異なり、ルリが着ている服の構造はあなたにとっては複雑怪奇以外の何物でもない。しかしルリはそんなあなたに幻滅することなく、逆に自ら服を脱いでいく。

あなたの部屋——すでに日常の中にユカリという宝石が紛れ込んでいる部屋で、更にもう一つの宝石が全てを晒そうとしている。

声優であり、アイドルであり、それと同時に男性たちのオナペット——声優として名乗るには優れすぎている容姿とスタイル、それを隠して晒さない様子、それらが男たちの獣欲を加速させるルリという女性。

そんな彼女が、あなたの部屋で服を一枚一枚脱いでいっているのだ。

「この先は……お願いします……♡」

脱いだ服を綺麗にたたむこともしないまま、ルリはあなたに対して身体を見せつける。下着しかまとっていない、本来であれば男性になど見せてはいけない姿。

ルリの下着は、服装と同じく派手だった。ユカリのようなシックな様子とは違う。濃いピンク色を基調に黒いレースを施されたブラとショーツ。男好みという言葉を具現化したような格好だ。

「ココ……苦しいので……♡」

そうしてユカリが指さしたのは、彼女自身の谷間である。確かに苦しそうだ。

ミッチミチに詰まった乳肉が今にもあふれ出しそう。サイズが小さめの下着をつけているというのは本当のようで、スライムのように柔らかく大きな乳房は、持ち主であるルリ自身から窮屈なブラの中に押し込まれるという虐待を受けていた。

「は、外して、ください……♡」

ルリはあなたに懇願する。が、決してしおらしくなったという訳ではない。あふれる性欲に突き動かされ、ようやく見つけた肉バイブにその先を催促するような、ワガママな要求だ。

だが、ルリに要求されてそのデカパイを拝める機会を得ることが出来る男性がこの世に何人いるだろうか。どう考えても、あなたしかいない。故に、あなたがルリの要求を断る理由は無かった。

ぷちっ……♡

「こ、こっちは……手慣れているんですね……♡」

ユカリとの情事の中で慣れてしまったホック外し。最初は巧く出来なかったそれも、今のあなたにとってはお手の物だ。そんなあなたの挙動一つひとつに、ルリは興奮を隠せない。

(ブラ、ホック三段なのに……簡単に外された……♡ この人、手馴れ過ぎてる……♡)

普通の人間が拝む機会などそうそう存在しない三段ホックのブラも、あなたを困らせることは無かった。緊張しつつも慣れた手つきでルリのブラを外し、そのままはぎ取る。

むわあ……♡♡♡

その瞬間、甘ったるく絡みつくようなニオイが部屋中にあふれた。

「おっぱい、どうでしょう……？♡ 男性は、こういうのは好きなんですか……？♡」

ブラをはぎ取られ、乳房を全て晒しながら、ルリはあなたに感想を求めた。

これを嫌いだと言う男は世の中にいない。そう断言できるルリの乳房だった。

ハリがあるユカリの乳房とは根本的に異なる。柔らかく、それ故に重力に引かれている。しかし、決して垂れているわけではない。そんな中でも膨らみと形の良さを失わない。ル

リという声優に、天は二物を与えた——というよりも、アイドルじみた活動をする中で水着でも着なければ宝の持ち腐れとも言えるデカパイだ。

びくっ……びくっ……。

「あっ……♡ チンポ、震えてますね……♡ 私のおっぱいのニオイで、興奮したんですか？♡」

ルリは目聡くあなたの反応を見つける。彼女の指摘通り、ルリの乳房から——というより谷間から部屋にあふれた甘いニオイを受けて、あなたの肉棒は暴れ回っている。すでに先ほどルリから受けた誘惑も相まってガマン汁を吐き出し、ズボンにシミを作ってしまうような勢いだ。

「いいですよ、もっと嗅いでも……♡」

ルリはムラつきながらも、あなたの肉棒を楽しませることを忘れない。

くばあ……♡

乳房を持ち上げ、両側に開く。そうすると、谷間でグツグツに煮詰まったフェロモン臭が更にあふれてくるのだ。

あなたですら、ユカリとのセックスでは感じたことのない感覚。脳を直接犯してくるような、淫らさで全身を包まれているような感覚だ。

あなたは思わずユカリに抱きつく。その巨大な乳房の間に顔を押し入れ、ニオイを堪能する。

後頭部を殴られたような感覚と共に多幸感が広がる。勃起はすでにはち切れそうなほどに膨らみ、今すぐにでもこの雌を犯したいと叫んでいる。

「ふふ……♡ がつつかないでください……♡ ユカリさんにも、いつもそんな様子なんですか？♡」

嘲りのような台詞を口にしながら、ルリはショーツに手をかける。その動きが意味するところを感じ取り、あなたは邪魔をしないように名残惜しさを感じながらもルリから一旦

離れた。

「んっ……♡」

余裕そうな口ぶりだが、やはり全裸を晒すのには恥ずかしさがあるようで、ルリはショーツを脱ぎ去ると共に小さく声を漏らす。

「————い、いかがです……か？♡」

そうして全裸になると、ルリは背中で腕を組んだ。身体の前面を一切隠すことが出来ない、あなたという男性に対して裸体の隅から隅までを捧げるポーズ。背景に存在するあなたの生活感が、現実感を狂わせる。



そんなルリを前にして、もっとじっくり観察しようなどという驕り高ぶった余裕をあなたが持てる筈もなかった。

ユカリに公認されたという免罪符も相まって、そのままルリを強引にベッドの上へと押し倒したのだった。

ぬちゅっ……♡ ぬちっ……♡ ぬちゅ……♡

「ま、待って……♡ お、音……立てないでください……♡」

今すぐにでもルリへ馬乗りになり、その乳房を肉棒で犯したい衝動に駆られたあなた。だがそれ以上に、ルリの方がムラついていた。ベッドに押し倒されるや否や腰をへこつかせ、自分の下半身を愛でてほしいとあなたに懇願する。

本来であれば握手するだけで金を積む必要のある女性から、雌穴をほじくるように懇願される。それは、あなたにとっても悪い気分ではなかった。

「そ、こっ……♡　そこ、よわい、です……っ♡」

あなたにカマをかけていた時の態度が嘘のように、ルリは従順かつ淫乱だった。雌穴はすでにドロドロに濡れていて、下着を着けたままではお釈迦にできてしまっていただろう。湿り気が漂ってくるようなそこへゆっくりと指を入れると、二本の指を簡単に咥え込んだ。

だが、決して使い込まれている様子ではない。あなたの指にきゅうきゅうとしがみつки、そのまま舐め回すように蠢く膣穴。そして、その内側を優しくカリカリ刺激してあげると、ルリはそれだけで腰を浮かせてしまうのだった。

「こ、んなの……っ♡　こんな、コト……いつも、ユカリさんに……っ♡」

正確には違う。ユカリもあなたとのセックスを楽しんでいるのは確かだが、ルリは感じすぎている。

だがしかし、自分のベッドの上で、自分の身体の下に敷かれながら、ルリという極上の女性が性感に喘いでいる。その

様子は、あなたの男性としての自尊心に近い感情を満たすには十分すぎる光景だった。

ぬちゅっ♡ おちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡

「お、音立てないで、って……言ったのに、い……♡ い、いじわる……っ♡」

あなたの手マンで可愛がられている間のルリは、彼女が持つイメージとはかけ離れて子供っぽく、可愛らしい。潤んだ瞳であなたを見つめ、文句を言う。けれど、文句を言うたびに欲求不満な膣穴がうねり、あなたの指を更に楽しませるのだ。

そうして、あなたの心にふっと魔が差した。

先ほどルリに担がれたこと、彼女をユカリ公認で抱けること、そして何より——ルリが自分の思い通りになっていること。

それが、あなたのサディスティックな部分にほんのりと灯

を点した。

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

「やっ……！？♡ 待って♡ 待って♡ それ、だめ……っ♡
ダメだから……っ♡」

手マンの速度を上げる。膣穴を舐めるように、小刻みに、一定のペースで。先ほどルリが自分から晒した弱点を突くようにしながら、執拗に。

「だめっ……！♡ だめだめだめだめ……っ！♡」

ルリはこれから自分に何が訪れるのかを察した。自分自身では何度もやったことはあるが、他人にされるのは初めての行為。

(イク……っ♡ イっちゃう……っ♡ イかされる……っ♡
ダメ、くる……っ♡ すごいくる……っ♡)

「ま、待って……！♡ ほんとに、だめっ♡ ダメっ！♡ イ

くっ♡ イくイくイくイクイク……ッッッ！♡♡♡」

ルリの膣穴がひとときわ強く絞まるのと同時に、あなたは指先を一気に引き抜いた。

ブシュッ……ッッッ♡♡♡ ブシッ……ッ！♡

ぶしやああああああああ……♡♡♡

「あっ……あ♡ あ、あああ……♡ し、潮吹き、しちゃった……♡ さ、させられ……ちゃった……♡」

ルリは腰をがくがくと痙攣させながら呆然と呟く。絶頂の快感が背筋から全身を支配して、身体と心が別になったような錯覚すら覚える。

ぶしっ……♡ ぶしゅっ……♡

長い潮吹きを終えた後も、残り汁を吐き出し続ける自分の股間を見つめながら、ルリは自身の身体があなたに対して懐き始めているのを、実感せずにはいられなかった。

「ふっ……ふ、う……♡ はあ……ふう……♡」

アイドル声優にあるまじき潮吹き絶頂の後、ルリが呼吸を整えるにはしばらくの時間を要した。仰向けになり、身体の左右にトロリと流れていく乳肉を上下させながら、必死に呼吸を整える。

その間にもあなたは、その豊かで指がどこまでも飲み込まれていくような軟らかさの乳肉を揉んだり、ぐちょぐちょに濡れた状態の秘所を撫で回しながら、ルリを喰らう瞬間を今か今かと待っていた。

「はあ……あ……♡ お、お待たせ、しました……♡」

ルリの方も、溜まりに溜まったムラつきを一度だけの絶頂で終わらせられるはずがない。むしろ火照りは増していて、視線は勃起したあなたの肉棒にだけ注がれている。

「お、お願い……します……♡ きょ、今日は……大丈夫な、日……なので……♡」

あなたも、もう待てる気がしなかった。

ルリの脚——身体の豊満さに比べれば明らかに細いと言わざるを得ないが、同時にむっちりとした肉が付いて揉み心地の良いその両脚の間に身体を滑り込ませる。

すでに湯気が立つほどに濡れて火照っているルリの下半身。その熱気に当てられて、あなた自身の肉棒もはち切れそうだ。

ぬちっ……♡ ぬちゅっ……♡

「んっ、う……♡ は、あ……う……♡」

コンドームも着けないままに、ルリの秘所に二回三回と亀頭をこすりつける。本来であれば無法な行為だが、内心でルリの“試し”に憤っていたあなたは、少しでも乱暴で独善的になっている。

そして、そんなあなたを迎え入れようとするルリの秘所から、ねっとりとした愛液があふれる。それは、ともすれば精

液と間違えそうなほどに白濁していた。

そんな粘液を、ルリの無毛の割れ目と自身の亀頭に馴染ませるように何度も肉棒を往復させる。あなたがそうして意地悪に焦らすような動きを繰り返す度に、ルリは腰を小さく跳ねさせ、その反動で乳房をプルプルと揺らした。

「はあ……♡ はああ……♡ き、きて、ください……♡」

ぬちゅっ……ッ♡

「ん、つくうう……ッ♡」

ルリの腰をつかみ、そのまま無遠慮に肉棒を押し当てる。肉厚なルリの秘所は生意気にも一度あなたの肉棒を押し返そうとするものの、男性の力に敵うわけもなく、そのまま異物の侵入を許してしまう。

「あ……つくゝう……ッ♡♡♡」

ぶしゅっ……♡

あなたは腰を突き入れ、肉棒の先端でルリの奥の方を圧迫する。たったそれだけの動きで、ルリは軽く絶頂し、また短い潮吹きをした。

(ダメ……♡ チンポ、よすぎる……♡ お腹のナカ、すごい喜んで……ギュッて抱きついてるし……♡)

ルリ自身も、自分の胎内で何が起きているかを理解していた。挿入されたあなたの肉棒に驚き、次の瞬間にはもう愛おしくなっている。絡みつくようにまとわりつき、その形を愛でている。自分の身体の節操の無さが恥ずかしくなる。

ぬ……っちゅ……♡

「ん、ひ……い……♡」

あなたがゆっくりと腰を前後に動かすと、ルリは過剰と思えるほどの反応を示した。ベッドシーツを握りしめ、歯を食いしばり、懸命に声を我慢する。

しかし、それこそがルリの素の反応である。

とんでもないエロ女だった。普段見せているような、美人でスタイルもいいが、近づきがたいような雰囲気——男ウケを狙っているとも思われかねない服装と容姿。そんな見た目からは想像も出来ないチョロマン。

チンポもセックスも大好きなエロ女——それが、ルリという女性の正体だった。

——ずちゅッ♡ ずちゅッ♡ ずちゅッ♡ ずちゅッ♡ ずちゅッ♡

「んゝッ♡ あッ！？♡ ま、まって！？♡ いきなり、はげし……！？♡」

そうとわかれば、あなたがすべきことは一つだった。ルリの躰直しである。チンポであれば何でも尻尾を振ることがないように、あなただけのモノにするために、その雑魚過ぎる雌穴を掘削していくのだ。

(ダメ……ッ♡ 乱暴にされるの、ダメ……ッ♡)

突然激しさを増したあなたの腰の動きに困惑するルリ。けれど身体は素直に反応して、あなたのピストンを受け入れてしまう。

ずちゅ♡ずちゅ♡というピストン音に合わせ、シングルベッドが揺れる。そして膣奥をえぐる度にルリは愛液を垂れ流しにして、シーツどころかマットレスまでダメになってしまうくらいにドロドロに濡らしていく。

「や、やめ……っ♡ おまんこ、つぶれる……っ♡ いじめ、ないで……って……♡」

ルリが今さら懇願しても遅い。いくらあなたがユカリの恋人であろうが、肉棒を挿入までした極上の女を、自分のモノにせずに済むはずがない。

ルリをベッドへ押しつけるようにしながら、そのデカパイを堪能する。手のひらの形が付くくらいに揉みほぐし、左右に広げたり、寄せたり、変幻自在に形を変える軟らかさを堪能する。

(この人、私のこと、オトそうとしてる……っ♡ チンポで
舐て、モノにしようとしてる……っ♡)

ルリもようやくあなたの意図に気がつき始めた。最初は友人の恋人を品定めするくらいの心構えで。そしてその次は、便利な肉バイブが見つかったと思う程度だったが、実際には違う。

(し、子宮で、ガチ恋させられる……っ♡♡♡)

ルリはあなたを侮っていたのだ。ユカリと何度も身体を重ねて醸成されたテクニックを、多少性欲の強い生娘の分際で受け流せるはずがないのだ。

ぬゝ ぢゅっ♡ ずぢゅっ♡ ずぢゅ♡ ぶぢゅっ♡

「そ、そん、な……っ♡ せ、セックスしただけで、好きに、
なんて……っ！♡」

ずぶっっっちゅんっ♡♡♡

「ふひい……ッ♡♡♡」

口答えしようとするルリを叱るように、あなたは腰を深く突き入れる。ルリのGスポットどころか、子宮口まで潰すような暴力的な挿入。

むしろ、こんなことは恋人であるユカリには出来ないかもしれない。つい先ほど出来たセックスフレンド——パコ穴のルリにだからこそ、出来る行為だ。

「い、イク……ッ♡ ま、またイっちゃう……ッ♡ イきます……♡ イく……ッ♡♡♡」

ぶしやあああああ……♡♡♡

行儀良く宣言をしてから、ルリが絶頂する。つま先をピンと伸ばし、あなたの肉棒を舐め回すように締め付けながらの絶頂。正常位の状態で交わりながらも、子宮はしっかりと降りてきていて、あなたの肉棒の先端へキスするように触れている。

そんな風に刺激されれば、あなたももう限界が近かった。

ずちゅッ♡ずちゅッ♡ずちゅッ♡ずちゅッ♡ずちゅッ♡

「ん、あゝ……ッ♡ ふ、いいい……ッ♡ んゝッ♡ ん、う
ううう……ッ♡ ふ、う♡ ん、つくううう……ッ♡」

あなたのピストンが速まる。ルリは全身を緊張させ、それでも口ばかりは緩み、まるであなたへ懇願するように舌を垂らす。

「あむっ……♡ んつく……♡ んく……♡ ——んちゅ♡
んちゅれろ……♡ ちゅばっ……♡ んちゅっ……♡ ちゅず
……ずりゅ……♡ んちゅ……♡」

そんなだらしのないルリの口へ向けて、あなたは唾液を垂らした。まるで痰壺のように扱われているにも係わらず、ルリは嬉しそうにあなたの唾液を飲み下す。

ルリの痴態に辛抱溜まらず、あなたはそのまま彼女の唇を奪った。キスするだけでも夢のような女——アイドルに対し

てベロ肉を捧げさせながら、腰を一心不乱に動かす。

膣穴を掘削し、唾液の甘さを堪能し、指を絡めて手を繋ぎ、ルリの全身をあなたは味わっていた。

ずちゅッ♡ずちゅッ♡ずちゅッ♡ずちゅッ♡

本能的に腰の動きが激しくなる。ルリの膣奥にドロリとした白濁液を吐き出して、自分のモノだとマーキングしたい。それ以外の感情がなくなっていく。

「んッ♡ んうう……ッ♡ ぷああ♡ イく♡ またイっちゃい、ます……ッ♡ 一緒に、一緒に……イきたい……ッ♡」

まるで恋人のように懇願するルリ。そんな彼女の願いに応えるようにあなたは腰をひときわ深く突き入れ、そして――

ぶびゅっ♡ ぶびゅびゅるるるるるるる♡

ルリの膣内にグツグツと煮立ったザーメンを吐き出した。

(で、出てる……ッ♡ 熱い……♡ ザーメン、すごいあつい……♡ お腹、圧迫され、る……っ♡ 気持ち、いい……っ♡
♡♡)

ルリの試練によってすでに準備万端だった精液は、彼女の子宮めがけて一気に流れ込んでいく。声優として、アイドルとして、女性として、決して今日会ったばかりの男が汚してはいけない子宮。そこへ、ドロドロの白濁液が注がれていく

「あ……っく……ううう……♡ うあ……んゝっ……♡ は、うう……ううう……♡」

ぶびゅびゅるるるるる♡♡♡ びゅびゅるるるるる♡♡♡ びゅ
るるるるる♡♡♡ びゅるるる♡♡♡ びゅるるる♡ びゅっ♡ び
ゅっ♡ ……びゅる♡

ルリは声に出来ないうめき声を漏らしながら、抵抗することなく、あなたの精液を受け止め続けたのだった。

「——あの……おしっこ、飲んでみたいです……♡」

ルリの言葉に、あなたは耳を疑わざるを得なかった。

ルリの膣内に散々中出しをし、それだけであなたの勃起もルリの性欲も収まる訳がなく、何度も何度もパイズリやフェラチオで射精し、流石に金玉の中身も空っぽになったあなたが、思い出したかのように尿意を催して、ベッドから立ち上がった時だった。

最初に会ったときの印象は鳴りを潜め、まるでねだるよう
にあなたを見つめるルリ。

すでにあなたは、ユカリには自分の小水を何度も飲ませたことがある。あなたが喜ぶのと、あなたのモノにされているような感覚をユカリは楽しんでいるのだ。

しかし、ルリはそのことをユカリから聞いた上であなたにお願いをしている雰囲気ではなかった。あくまでルリ自身の意志で、あなたの排泄物を飲みたがっている。

とんでもないスケベ女だった。

数回にわたる射精で絆されているあなたの頭は、もう正常な判断が出来ない。

“女性に小便を飲ませるのは普通ではない”

とか

“声優の喉にそんな不純物を触れさせてはいけない”

なんていう倫理的な思考を出来る状態ではないのだ。

あなたはベッドに近づいて、ルリの頭を撫でる。さらさらとした黒髪は、汗に濡れていても心地よい。そうして頭を撫でられると、ルリは何を言われるでもなく、自分から口を開いた。

先ほど、精液と愛液で濡れた肉棒を散々掃除させたルリの口の中。そこに、再び肉棒を潜り込ませる。

場所はベッドの上だ。こぼさないようにあなたが指示すると、ルリは素直に口を閉じ、肉棒を咥え込む。

その状態で――

じょろ……じょろろろろ……♡

「んっ……んう……♡」

最初、ルリがしっかりと飲尿出来るか確かめるために、あなたはゆっくりと小刻みに尿を絞り出す。ルリは驚いたように一度二度声を漏らす、そのまま喉を鳴らして、口の中に流れ込んできた液体を飲み込んだ。

「らいひょうふ……えふ……♡」

そうして、上目遣いのままあなたに“大丈夫”と告げる。そんなルリの整った顔立ちを見ながら――

じょろ……じょろろろろろろろろ～……♡♡♡

あなたは下腹部の力を緩めて、小水を一気に流し込み始めた。

「んう……！♡ んっ……♡ んっく……♡ んく……♡ ん
っ……♡ んっ……♡」

ごくっ……♡ ごくっ……♡ ごくっ……♡

ルリは細く繊細な喉を鳴らしながらあなたの小水を飲み込んでいく。そのたびに、むっちりとしたデカパイが揺れ動く。

極上の顔立ちに極上の身体をした女。本来であれば男なんて選び放題、少し胸の谷間を見せるだけでも一生遊べる金を稼げるような女。

そんなルリに、あなたはいま飲尿をさせている。

その背徳感と放尿の開放感が、強烈な快感となってあなたを包み込んだ。

じょろろろろろろろろ……♡ じょろろろ……♡ じょぼ
っ……♡ じょろっ……♡ ——じょろろ♡

「んう……♡ んつく……♡ んくっ……♡ んっ……んっ…
…♡ んう……♡ ふはっ……あ……♡」

そうして放尿が終わると、ルリはしっかりと口の中に残った液体まで全部飲み干してから、ゆっくりと口を離す。

「はあ……ふう……♡ ごちそう……さまでした……♡」

そして彼女は、どんな娼婦でも及ばない顔と身体で、凡百の人間とは一線を画す煌びやかな声で、あなたにお礼を言うのだった。

ルリ編1 了